

どう かん きょう

真宗大谷派同和関係寺院協議会

2015 年 5 月 31 日発行

同関協だより

第 50 号



『平和の礎』平和祈念公園／沖縄現地研修会にて

* 第 50 号 主な内容 *

- ◇ 『同関協だより』50号に寄せて-----2～4
- ◇ 現地研修会報告「沖縄差別とは」---5～8
- ◇ 気になる一冊 ----- 9
- ◇ 2013 年度決算・事業報告 ----- 10
- ◇ 2014 年度予算・事業計画 ----- 11
- ◇ 会長コラム「同関協道」----- 12

私たちは

教団内外における部落差別の克服を願いとし

差別に苦しむものが一人でもいる限り

その差別からの解放を自らの課題とする

「同関協」規程前文

『同関協だより』五十号に寄せて

同関協の願い

会長 菊池成明

『同関協だより』が創刊五十号を迎えました。

一九七五（昭和五十）年の創刊号を手にとってみますと、巻頭に記された「発足一年を迎えるについて」初代会長西川義愼氏の文章に、「現代社会に於ける差別の現実を直視し、宗門人として此の解放が実あらしめる為に各地にあつて精進すべく決意した次第であります。吾々大谷派の僧侶として差別に苦しむ同和地区の御門徒が一戸でもあれば、何としてもその差別の苦渋より完全解放され、共に同信同行の法縁を深めて参るべきは当然の事でありましょう。」と記述されています。

創刊より四十年過ぎ、真宗大谷派同和関係寺院協議会（以下「同関協」）に賭けたこの創刊者たちの思いとその後の力強い歩みを鑑みる時、私たちはどれほど励まされる事でしょう。

人間解放への願いに生きた先人、先輩方から引き継がれてきた歴史を映し出してきた『協議会報』『同関協だより』五十号は、一里塚にすぎません。

「現代社会に於ける差別の現実を直視し、宗門人として此の解放が実あらしめる為に各地にあつて精進すべく」といわれる中で、一九八七（昭和六二）年から今日まで、各地で現地研修会を行い、その報告が記載されてきました。

地域によって異なる部落差別の現実を直視し、私の知らない差別事象に出会った時、根深い差別があると知らされました。知らないことを当たり前にしてきた私の身の事実が、親鸞聖人の御同朋御同行の教えを見失っていたということであります。

難波別院輪番差別事件を機縁として、宗祖に背いてきた教団そして私たち一人ひとりの差別性・非真宗性が、今もなお問い続けられています。私たちは糾弾会で発せられた「それでも親鸞の弟子か」との悲痛な叫び声を、自らを問い続ける教えとして決して忘れてはなりません。

同じ宗祖の教えに生きる者として、差別に苦しむ人々の声をしっかりと受けとめ、差別してきた人も、差別されてきた人も、かけがえない存在として互いに尊敬し合える、御同朋御同行と言いつける世界を実現していくことが、「同関協」の願いであります。

同朋会運動の主題とは

常任委員 片山 寛隆

『同関協』発足から四十年、そしてその歩みを刻んできた『同関協だより』発刊五十号という節目を迎えるということは、あらためて先人の担ってこられた人間解放の願いを再確認する機縁でもあります。あの難波別院輪番差別事件の時、宗門の認識に対して提言し助言をされてきた先人が中心となってここある仲間と呼び掛け、五十名程で出発したのがこの会の始まりでした。

部落差別を生み出してきた宗門のもつ差別体質を内から自己批判し、宗門改革を叫んで立ち上がった武内了温氏を中心とした「真身会」、「大谷派同和会」の流れが宗門全体の流れにはなりません。ようやくここある人々によって受け継がれていたにもかかわらず、難波別院輪番差別事件が生じたのであります。

宗門は、その後も幾多の差別事件を惹起させ、その根底にある問題の認識の欠如が社会性の喪失にあるということと、宗祖の立教開宗の精神及びその教法を曖昧にしてきたことに尽きるのではないか。つまり宗祖の開かれた精神と教法に拠って立つ宗門が、人間平等の精神を社会的に具現する努力を忘却して今日に至ったことの結果であったということを暴露したものであります。

一九六九（昭和四四）年に「大谷派同和会」から出された「建議」には、「人間疎外よりの回復、人間尊厳の確立はいよいよ祖師の思想と信仰に立っしかないという反省が同朋会運動の展開」であると言いつけられています。そして、「真宗の名における非真宗的現象をもちつつ『真宗』と称して来た積弊のなかでまだあやまった現実についての直視と反省がなされていない」とありますが、同朋会運動も五十年が経過した今、この言葉にどこまで応えることができているでしょうか。

同朋会運動の中でいかにして「同和問題」を主題化するかという宗門の課題が明白になりました。それが一九七八（昭和五三）年、当時の宗務総長嶺藤亮氏の時に刊行された『仏の名のもとに』『はじめに』にある「宗門の同和運動推進の基本姿勢は、同朋会運動と並列するものではありません。同朋会運動が同和運動推進の母胎となり、同和運動の推進がまた同時に、同朋会運動の正しさの証となるもの」であります。

しかし、部落差別問題は宗門にとって信仰の課題ということが明確になったにもかかわらず、古い宗門の体質は堅牢なまま今日に至ってきました。同じ体質をもちつつも、部落差別に苦しむ人々と共にする中で、その体質に気付かされ痛みながら、人間解放の願いを自らの歩みとしてきた先人の足跡を尋ね、今の仲間と共にこれからも宗門内外に対して、差別に苦しむ人々の声を発信し続けていくことが、この会の使命であります。

新三役を中心に節目を迎え、新たな「同関協」を共に迎えられたことを感謝いたします。

『同関協だより』五十号に寄せて

『同関協だより』五十号に寄せて

「五十号」の節目に朝野温知師を偲んで今思うこと

解放運動推進本部 前本部委員 浜口安宏

一昨年の八月二日、滋賀県の信楽会館において、朝野温知師の三十三年の法要が地元の方々や師との関係者、解放運動推進本部の参加によって勤められました。今回の五十号発行の節目にあたり、生前にご縁のあった方々、また師の書物を通じて、生き方や思想、真宗の捉え方について改めて考えさせられました。その中で先生に影響を受けている自分を再認識しました。

勤行の後、師の最後の提言となった「同朋教団建設を訴える」の朗読が行われました。その後、師の在りし日の思い出を娘さんや、地元の代表者が語られました。

解放運動に影響を与えた「同朋教団建設を訴える」は、一九七九年の「同関協」総会において語られました。そして、翌年の一月三十一日に発行された『同和関係寺院協議会報』第九号に掲載され、『真宗』一九八一年一月号にも掲載されています。また『宗教に差別のない世界を求めて』朝野温知遺稿集（下）にも収録されています。ご一読をお勧め致します。

この提言で朝野師が明確にされたのは、「我々同和地区に居住しており、差別されて貧しく、御同朋御同行を宗是とする本山からでさえ疎略に扱われながらも、忍辱精進のうちに門徒を守ってきた末寺住職らの誇らしき名

りである。この名のりによって何をなすべきかについては、おのずから明らかになってくると思う。主体的目的は、我々に親鸞をかえせということに尽きる」と。

考えてみれば、部落差別問題をはじめ様々な人権問題について教団として、その時その時にそれなりの取り組みが行われてきました。しかし、今顧みて教団内における差別事件をきっかけに、部落解放同盟への回答書、以後の「同和部」の設置、諸々の取り組み、今その足跡を再度振り返って、真に検証してきたのかと自らに問いかけて見た時、甚だ心もたない思いをしています。それは「同和推進本部」が「解放運動推進本部」と名称を変えてきましたが、合わせて二十八年間の経過において関わってきた私にとって、教団内における差別問題・人権問題がいかほどの力となり、共に歩んできた関係者との協働がいかにか成し得てきたのかとの反省の中で、朝野先生の三十三年の法要に参加させていただいて、いみじくも自らの解放運動の在り方・内容についてもっと深く検証しなければと顧みたことです。

浜口氏は二〇一五年一月二十五日に逝去されました。解放運動に身を尽くされたご生涯でした。この寄稿文が同関協に対する最後のメッセージになりました。

2013 年度「同関協」現地研修会 in 沖縄

テーマ「沖縄差別とは」

2014 年 5 月 20 日～22 日



二〇一四年五月二十日から二十二日にかけて、二〇一三年度「同関協」現地研修会が、「沖縄差別とは」というテーマのもと開催されました。

二十日は、沖縄別院を会場に沖縄国際大学教授の前泊博盛氏から「嘉手納基地の現状」について講義をいただきました。

二十一日は、読谷村の間法道場「何我寺」にて沖縄別院衆徒の知花昌一氏から「沖縄差別とは」の講義、続いて「チビチリガマ」でフィールドワークを行いました。また彫刻家の金城実氏が主催する「琉球親鸞塾」を訪問した後、佐喜眞美術館や嘉手納基地、沖縄国際大学の米軍ヘリコプター墜落現場を視察し、宜野湾市の嘉数高台公園から普天間基地に離発着するオスプレイなどの米軍機を見学しました。

翌二十二日、摩文仁の平和祈念公園を訪れ、平和の礎にお参りしました。

毎年、「教団内外における部落差別の克服を願いとし、差別に苦しむものが一人でもいる限り、その差別からの解放を自らの課題とする」ことを目的に開催されている同関協の現地研修会。

今回も現地に身を運び、その地の実状を知るとともに、現地関係者との交流の中で意見と情報の交換の場を持ち得たことは、ともに連携を保ち、課題の共有をはかる上で貴重な場と時間になりました。

現地研修のフィールドワークでは、二〇〇四年に米軍のヘリコプターが墜落した沖縄国際大学へ行き、残されていた焼け焦げた木を見ました。墜落当時よりも若干小さくなっていたましたが、民間地の真ん中に落ちた怖さをそのまま残しています。また、この墜落事故にはヘリコプターの機材に使われていた放射性物質拡散の疑惑もあり、日本の国土の問題であるにもかかわらず、多くの情報が隠されていることを知ることができます。

道を車で走っていると、観光マップには載っていない多くの米軍基地の関連施設があるのが分かります。沖縄県の面積は日本国土(377961㎢)の〇・六パーセント(2276㎢)にもかかわらず、日本にある米軍基地の七五パーセントが集まっています。その中でも、嘉手納基地は甲子園球場

の八〇〇倍の広さ(2000ヘクタール)です。立ち寄った道の駅「かでな」から基地を見ることができます。この道の駅の一階売店で販売しているサーターアンダーギー(沖縄ドーナッツ)は美味しい。沖縄別院輪番のオススメです。

米軍機墜落で被害を受けたアカギ／沖縄国際大学



また現在、移設が問題になっている普天間基地の周りには、多くの学校施設や、住宅地が密集しており、如何に危険な場所に基地があるかということがよく分かります。危険性の要因に、オスプレイの配備問題があります。先般、滋賀県の高島の饗場野演習場においてオスプレイを用いた訓練がありましたが、この軍用機は非常に墜落率が高いとアメリカ本土で指摘されています。つまり、民間地に墜落した場合、相当な被害をもたらすであろう事が分かっており、そのため辺野古沖への移設を急いでいると言われています。しかしながら、沖縄の基地負担軽減のため、他の基地へ配備したり、他の地域で演習を行うことも、沖縄の離着陸が増え、事故が増える確率が高くなり、いずれにしても沖縄の負担軽減にはなりません。



会場の沖縄別院

一日目、沖縄国際大学教授の前泊博盛氏の講義を受けました。データから見る沖縄の問題を指摘され、一般に「沖縄は基地があるから潤っている」ということの誤解を正されました。軍用地が返還され、その跡地に商業施設などを建てた場合、雇用が増え、税収

くなり、現在では閑古鳥が鳴いていると言われます。

第二次世界大戦以降、米軍は沖縄を東アジア戦略の要衝の地として「キーストーン・オブ・パシフィック」太平洋の要石」と呼んでいます。ベトナム戦争時は補給拠点として重要な基地となり、現在は世界戦略の要にもなっています。世界地図を開いて頂き、沖縄を中心に円を描いていただければ、このことがよく分かります。一五〇〇キロ圏内に、アジアの主要都市圏がすっぽり収まります。それ故に、なかなか基地返還が進まないのも現状です。

二日目は読谷村に移動し、何我寺（ぬうがじ）という聞法道場を開いておられる知花昌一さんから話を聞きました。知花さんは、読谷村で「反戦地主」として親子二代にわたり活動を行ってこられ、現在も沖縄の平和問題に深く関わっておられます。

知花さんは「琉球処分」と呼ばれる沖縄の歴史（明治政府による日

生活問題であり、沖縄のアイデンティティや生き方の問題であるとはつきりと言われます。

その後、近くのチビチリガマ（防空壕）を実際に見てお話を聞きました。このガマは戦争の遺跡である一方、ご遺族の方にとっては聖域にあたります。その場所で、「集団自決」が行われ、一〇〇名近くの方がお亡くなりになっているからです。その「集団自決」について、米兵はビラなどによって投降するように説得しましたが、その言葉を信用せずに、「捕虜としての辱めを受けるくらいなら、自決せよ」という教育によって、多くの命が奪われたと言われます。一方で、米兵は捕虜に対して丁寧に扱うということを知っていた人のいたガマでは、全員が生き延びておられます。このことから、教育の怖さと正しい教育を受けることの大切さを語ってくださいました。

A group of people are seated in a room, facing a stage area where a presentation is being given. A whiteboard is visible on the right side of the stage.

本への併合・沖縄戦・アメリカへの譲渡・日本への返還」と、ご自身が携わっておられる米軍基地の借地についてお話をされました。「米軍基地に土地を貸していたものが返還され、土地収入が無くなったからといって生活に困っている人はいない」とおっしゃいました。沖縄における基地反対運動は政治ではなく



普天間基地に向け住宅街の上空を飛行する米軍機

最終日は糸満市にある平和祈念公園の平和の礎に行きました。参加者の身内の方が沖縄戦で亡くなっておられ、その名前が石碑に刻まれているのを見られて、今までの冗談ばかりをおっしゃっていたにもかかわらず、しんみりとなされたのには心を打たれました。

普天間基地に隣接したところに、「佐喜眞美術館」という美術館があります。米軍基地に摂取されていた自分の土地を取り戻し、建設された「平和美術館」です。その構造は特殊で、屋上の展望台から見下ろすと、基地の中にフェンスを押しやり、食い込むような形で建物が建てられています。その一方で、基地のフェンスの中には多くの墓地が点在します。如何に、土地の返還が難しいものであるのかが見えてきます。常設展示には画家の丸木俊・位里夫妻が沖縄戦について描いた大作が掲げられています。その作品の前に立ち、色々考えるのも大切かも知れません。



次回はいつ沖縄へ行けるか分かりませんが、沖縄の問題については「今」自分が住んでいるところでも考える事が出来ます。何処か遠くで起こっている事として他人事にするのではなく、もっと身近な事として考えていかなければと思います。そして、これは部落差別問題にも通じます。

◇前泊博盛氏の本

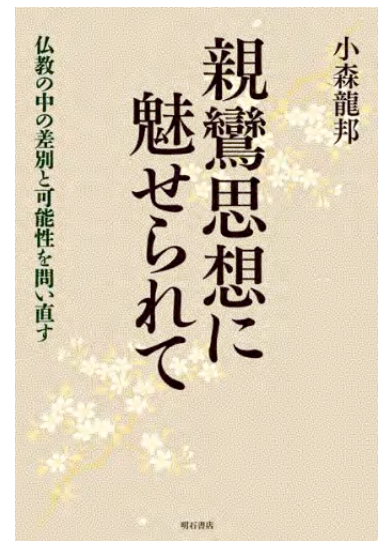
(編集委員 吉田 剛)

「もつと知りたい！本当の沖縄」（岩波ブックスレット）

「沖縄と米軍基地」(角川 one テーマ 21)

◇佐喜眞美術館 館長 佐喜眞道夫氏の本
「アートで平和をつくる」（岩波ブックレット）

一冊になる気



『親鸞思想に魅せられて』
 仏教の中の差別と可能性を問い直す
 小森龍邦／明石書店／2014

「同関協」四十年の節目を迎え、『協議会報』『同関協だより』も五十号を迎えました。これまでの「同関協」の歩みの中で、我々は何を成し遂げ、また何が成し遂げられなかったのか、そろそろ総括する時がやってきたのではないのでしょうか。

そこで今回は小森龍邦氏の最新著作をご紹介します。ご存知の方もおられるでしょうが、小森氏は部落解放同盟中央本部書記長等を歴任され、常に解放運動の最前線で闘ってこられました。また大谷派の糾弾会にも参加される等、当派とは、浅からぬご縁をいただいております。

小森氏は解放運動を進める上で、宗教（仏教）の果たす役割を重要視され、その宗教的探求心は我々僧侶の見習うべきところ です。また特に親鸞思想に深い造詣を持ち、本書からは憧憬の念さえ感じさせます。であるからこそ、宗祖に背き如来の大慈大悲心を裏切ってきた真宗教団に失望し、いまだに差別と決別しえない我々に、痛烈な言葉を投げかけます。

「經典にある差別文言を後生大事に墨守しなければならない理由はない」

經典にある差別文言とは、『観無量寿經』（以下『観經』）に出てくる「是梅陀羅」という表現です。「梅陀羅」は長らく日本における被差別民だと訳されてきました。その意味を知りつつご法事があれば、差別に苦しむ御門徒の前で『観經』をお勤めし、何の疑問も感じえなかったり、何とかしようとして行動しなかったことが問われています。また宗祖が依り処とされた三部經だからとか、經典の差別文言を反面教師として学ばせていただくと弁解に終始するあり方には、差別の拡散につながるという考慮が全く欠如していると断じています。

さらに『観經』は「インドの梵文原典やチベット訳が見当たらず」（『仏教教典の世界』）を引いて、本当に釈尊の直説かどうか疑問を投げかけ、いつ頃できたものかわからない『観經』の差別文言を守り通す理由は存在しないと本書を結びます。

如来・釈尊・親鸞、三者の願い・思想・生き様の中に「是梅陀羅」なる言葉を見出せないところに、小森氏が重ねて使われた「すえとほりたること」（論理の一貫性）がないことに気付かされます。

「われわれの求めるものは、このような差別的『經典』の教説から解放されたい」との小森氏の願いが、重く心に響いてきます。

經典の文言を金言として、端から何が何でも死守するという立場ではなく、「同関協」として、差別からの解放を自らの課題とする者として、「是梅陀羅」問題を始め、未解決の困難な問題に当らなければなりません。本書がそのための一助となることを願います。

（編集委員 谷内正孝）

2013年度真宗大谷派同和関係寺院協議会決算書

自 2013 年 7 月 1 日
至 2014 年 6 月 30 日

歳入の部 3,373,960 円

歳出の部 2,716,490 円

657,470 円 通帳残高

歳入の部

項 目	項目	予算額	収入額	比較増減	備考
1	1 会 費	240,000	354,000	114,000	118ヶ寺 (@3,000)
2	1 本山助成金	3,080,000	2,712,690	△ 367,310	
3	1 繰越金	307,167	307,167	0	前年度より 繰越金
4	1 雑収入	2,833	103	△ 2,730	
	合 計	3,630,000	3,373,960	△ 256,040	

歳出の部

項 目	項目	予算額	支出額	比較増減	備考
1	1 会議費	1,930,000	1,877,780	△ 52,220	
	1 総会費	630,000	783,240	153,240	
	2 常任・専門委員会費	1,280,000	1,076,480	△ 203,520	
	3 会計監査費	20,000	18,060	△ 1,940	
2	1 事業費	1,340,000	613,710	△ 726,290	
	1 組織拡充費	400,000	221,300	△ 178,700	現地研修会 退任記念 内容証明
	2 会報費	590,000	392,410	△ 197,590	同関協だより 出版委員会
	3 調査費	350,000	0	△ 350,000	
3	1 ブロック活動助成費	320,000	225,000	△ 95,000	
	1 ブロック活動助成費	320,000	225,000	△ 95,000	ブロック協議会 助成
4	1 予備費	40,000	0	△ 40,000	
	1 予備費	40,000	0	△ 40,000	
	合 計	3,630,000	2,716,490	△ 913,510	

2013年度

真宗大谷派同和関係寺院協議会

事業報告

2013年

7月 8日 2012年度会計監査

17日 2013年度総会

18日 第1回 常任・専門委員会

8月 2日 朝野温知氏33回忌法要

9月 2日 第1回 東海ブロック協議会

9月11日 第1回 九州ブロック協議会

9月25日 第1回 近畿ブロック協議会

9月26日 三役・出版委員合同会議

(第1回出版委員会『同関協だより』第49号)

10月 9日 同朋三者懇話会

11月11日 第2回 出版委員会

12月 2日 第3回 出版委員会

12月 3日 第2回 近畿ブロック協議会

12月 9日 第2回 東海ブロック協議会

12月10日 第2回 三役会

12月31日 『同関協だより』第49号発行

2014年

1月16日 第2回 常任・専門委員会

臨時総会

2月 4日 第3回 三役会

(第4回出版委員会(『同関協だより』第50号))

3月 4日 第5回 出版委員会

4月16日 第4回 三役会

4月17日 第6回 出版委員会

5月20～22日 現地研修会(沖縄)

5月30日 第2回 九州ブロック協議会

6月 3日 第3回 近畿ブロック協議会

6月16日 第3回 常任・専門委員会

2014年度真宗大谷派同和関係寺院協議会予算

自2014年 7月 1日
至2015年 6月30日

歳入の部 3,400,000 円
歳出の部 3,400,000 円

歳入の部

項	目	項目	予算額	前年度予算額	比較増減	備考
1	1	会 費	240,000	240,000	0	80カ寺 (@3,000*80)
2	1	本山助成金	2,500,000	3,080,000	△ 580,000	
3	1	繰越金	657,470	307,167	350,303	前年度より 繰越金
4	1	雑収入	2,530	2,833	△ 303	
		合 計	3,400,000	3,630,000	△ 230,000	

歳出の部

項	目	項目	予算額	前年度予算額	比較増減	備考
1		会 議 費	1,880,000	1,930,000	△ 50,000	
	1	総 会 費	710,000	630,000	80,000	新基準旅費
	2	常任・専門委員会費	900,000	1,280,000	△ 380,000	常任・専門 3回・三役4回
	3	三役・ブロック長会議費	250,000	0	250,000	2回
	4	会計監査費	20,000	20,000	0	
2		事 業 費	880,000	1,340,000	△ 460,000	
	1	組織拡充費	180,000	400,000	△ 220,000	現地研修会
	2	会 報 費	300,000	590,000	△ 290,000	同関協だより 出版委員会
	3	調査費	0	350,000	△ 350,000	今年度より廃目
	4	事務局運営費	400,000	0	400,000	新規
3		ブロック活動助成費	240,000	320,000	△ 80,000	
	1	ブロック活動助成費	240,000	320,000	△ 80,000	4ブロック助成
4		発 送 費	140,000	0	140,000	新規
	1	発 送 費	140,000	0	140,000	
5		40周年特別事業回付金	230,000	0	230,000	新規
	1	40周年特別事業回付金	230,000	0	230,000	
6		予 備 費	30,000	40,000	△ 10,000	
	1	予 備 費	30,000	40,000	△ 10,000	
		合 計	3,400,000	3,630,000	△ 230,000	

2014年度真宗大谷派同和関係寺院協議会40周年特別事業予算

自2014年 7月 1日
至2015年 6月30日

歳入の部 530,000 円
歳出の部 530,000 円

歳入の部

項	目	項目	予算額	備考
1		40周年特別事業回付受金	230,000	
	1	40周年特別事業回付受金	230,000	経常予算より助成
2		本 山 助 成 金	300,000	
	1	本 山 助 成 金	300,000	本山より助成
		合 計	530,000	

歳出の部

項	目	項目	予算額	備考
1		会 報 費	420,000	
	1	会 報 費	420,000	40周年記念誌
2		会 議 費	40,000	
	1	会 議 費	40,000	編集会議
3		通 信 費	50,000	
	1	通 信 費	50,000	
4		予 備 費	20,000	
	1	予 備 費	20,000	
		合 計	530,000	

2014年度

真宗大谷派同和関係寺院協議会
事業計画

2014年

- 7月10日 2013年度の会計監査
23日 2014年度総会
24日 第1回 常任・専門委員会
8月 第1回 出版委員会
(『同関協だより』第50号)
第1回 三役会
第1回 40周年記念誌出版委員会
9月 第1回 三役・ブロック長会議
10月 6日 同朋三者懇話会
第2回 出版委員会
第2回 40周年記念誌出版委員会
11月 第3回 出版委員会
12月 第2回 三役会

各ブロック協議会(上半期)
『同関協だより』第50号発行

2015年

- 1月 第2回 常任・専門委員会
第3回 三役会
第2回 三役・ブロック長会議
2月 第3回 40周年記念誌出版委員会
2月上旬 現地研修会
3月 第4回 三役会
5月 40周年記念誌発行
6月中旬 第3回 常任・専門委員会

各ブロック協議会(下半期)

『同関協だより』の出版委員会は3回開催する。
(2014年度は、年1回発行)
40周年記念誌出版委員会は3回開催する。

同関協道

『同関協だより』四十九号にて紹介されていた映画『ある精肉店のはなし』を見てきた。大阪で七代続いていた家族。牛を育て、手作業で屠畜を行い、皮を剥ぎ鞣して太鼓を作り、その肉を販売し生計を立ててきた精肉店を追い続けたドキュメンタリーだった。

この映画を見て、ふと思い出した言葉がある。

ある法事場で、食肉店を営みながら解放運動に取り組んできた今は亡き古老の挨拶である。

「私たちの親族には、食肉に関わる仕事をしている者が多いが、決して恥じたり、卑屈になるようなことであってはなりません。私たちの祖先は、人様の嫌がるような死牛馬の処理などを仕事としてきました。皮はいろいろな製品に、各部位は食肉用として、竹の皮に包んで行商で売り、食糧難の時も町の人の貴重な蛋白源として大切にされてきました。骨は近くの山に埋めておき、骨粉業者が引き取りに來た時に、掘り起こし運んでいました。

命ある生き物を殺して生きていかなければならない私たちであるから、そのいのちの尊さを誰よりも大切に、一つ粗末にしてはならないことを祖先から教えられてきました。心に残してとどめておかなければならないものは、牛や馬の泣き声だけ」と心に刻むように語られた。

部落差別、職業差別という現実と闘い、力強く生きてこられた方の言葉の重さを、人間とその尊厳を、法事場を通して教えられた。また、私への大切な問いかけであると受け止めて、『同関協』四十年をむかえた今、今後の活動にいかしていきたい。

真宗大谷派同和関係寺院協議会会長 菊池成明

会費納入のお願い

* 年会費 3,000円 *

郵便振込口座番号

01010-6-2770

加入者名

同和関係寺院協議会

ご理解とご協力をお願いします

同関協だより 第50号

発行日 2015年5月31日

発行人 菊池成明

発行 真宗大谷派同和関係寺院協議会

〒861-3515 熊本県上益城郡山都町城平 992

延隆寺内 「同関協」事務局

TEL&FAX 0967-72-0570

E-mail a_priest_55_nk@yahoo.co.jp

編集後記

今号で『同関協だより』は50号の節目となります。諸先輩方が積み重ねてこられた重みをひしひしと感じます▼私自身は40号から編集に携わり、「同関協がゆく」等、色々な文章を書かせていただいています。そして、担当になるたびに「何を書こうか？」と頭を悩ませます。単に文章を書くのではなく、今後自分がどのように取り組むべきかを考えながら、文章を書いていくとしばしば筆が止まります。素直に、自分の思いを書けば良いのですが、何処かに「良く見せたい」という思いがあるのかもしれませんが▼部落差別は少しずつ解消されているように見えて、思わぬところが起こります。それは解消されているのではなく、深く潜在化しているだけなのでしょう。また、潜在化することで、解決したと勘違いされることも増えています▼7年後には水平社創立100周年、8年後には宗祖生誕850年、9年後には「同関協」結成50年がやってきます。その節目、節目の年に私たちは何を思い、「同関協」の発展的解消へとつながる活動ができるのか、皆さんと共に考え、歩んでいきたいと思えます▼この号が出る前に長年本部委員として活躍された浜口安宏さんがお亡くなりになりました。退職後、これから会員としてご活躍をお願いしていた矢先の出来事でした。小柄な体から発せられる土佐弁。その熱意を私たちは少しでも受け継ぐことができればと思います。(吉田剛)